

研究ノート

『「リビア」という国をラジオで追う』

第3回 クロノロジー ～2011年の政権崩壊と放送①～

坂上 裕規

『「リビア」という国をラジオで追う』

第3回は2011年のアラブ諸国政変の波とカッザーフィー政権崩壊までの、およそ9か月にわたるラジオモニタリングの記録のうち、2月から3月末までの流れをクロノロジー形式で紹介する。

【2011年のアラブ諸国政変の波とカッザーフィー政権崩壊】

2011年2月21日（月曜日）、隣国チュニジアに端を発し、エジプト、イエメンなどアラブ世界各地に広がった民主化要求の波がリビアにも飛び火し、国内情勢が緊迫の度を高めるに到った。カタルの衛星チャンネル「アル・ジャジーラ」がLJBCの地方局のうちベンガジとベイダが反政府勢力によって占拠されたと伝えた。

一報をうけて、リビアのラジオ・テレビ放送のモニタリングを開始した。ここからは、当時のメモをもとに時系列的に現地情勢を放送がどのように伝えていったか、リビア国内の各ローカル放送局が伝える番組の内容から見えた現地の様子の変化を紹介する。

世界のラジオとテレビの情報を掲載している年鑑「World Radio TV Handbook 2011」によると、LJBCの国内中波放送局各局は以下の通りとなっている：

648kHz	LJBC トブルク（海外向け「アフリカの声」を中継）
675kHz	LJBC ベンガジ
711kHz	LJBC ジェッフレン
792kHz	LJBC スルト
828kHz	LJBC セブハ
909kHz	LJBC ギアグブーブ
972kHz	LJBC スルト
1053kHz	LJBC トリポリ
1080kHz	LJBC クフラ
1125kHz	LJBC アル・ベイダ
1251kHz	LJBC トリポリ／海外向け「アフリカの声」も中継

1404kHz LJBC トリポリ（コーラン放送）
1449kHz LJBC アル・アッサ
1485kHz LJBC アル・ブラシュ（コーラン放送）

註）上記各局は特記なき場合はトリポリからの全中番組を中継

早速確認を行ったところ、リビア東部の主要都市であるアル・ベイダの LJBC（1125 kHz）が通常の番組を中止し「自由リビア放送 إذاعة ليبيا الحرة」と名乗って放送を始めたことが確認できた。アル・ベイダに近いもう一つの主要都市ベンガジの LJBC は確認時点では放送を休止しているか、あるいは何らかの理由により電波が出ていなかった。

リビア情勢の緊張は続いており、日本を含む各国の報道が伝える情報によると、ここに来て反政府勢力が勢いを拡大しつつあるとのことだ。ただ、ラジオ放送の面に限ると LJBC の放送はアル・ベイダを除いては通常通りの内容を放送しており、反政府の波はまだ大きな広がりを見せるまでには到っていないという印象であった。

そのような中、22 日日本時間（JST）午前 6 時、現地では 21 日 22 時、アル・ジャジーラがリビア東部の主要都市ベンガジの LJBC も反政府勢力側の放送を流し始めたことと速報した。

確認を試みたところ、ベンガジの LJBC ラジオが使用していた周波数(675kHz)では「自由リビアの声 صوت ليبيا الحرة」と名乗る放送が出ていることが確認できた。LJBC アル・ベイダ局とベンガジ局は通常ならば首都トリポリからの LJBC の全国ネット番組（全中番組）を中継しているが、この時はそれぞれ別々の独自番組を放送していた。さらにアル・ベイダ、ベンガジ両放送局は、お互いの周波数を紹介し、聴取者にアル・ベイダ、ベンガジの両方のラジオ放送を受信するように呼びかけを行うなどの連携もみられた。

いかにも急ごしらえといった趣の「自由リビア放送」（アル・ベイダから放送）は、明らかに素人がアナウンスをしていて、しかも慌てているのか、アナウンスのつかえや言い間違いも目立った。話の合間には行進曲調の歌が流れ（同じ曲が何度も繰り返し流れている）るなど、なんとか放送の体を保っているといった印象であった。

放送では色々な人物が次々に声明を読み上げたり、呼びかけを行ったりしており、緊迫感が伝わってきた。

【2月22日午前7時28分ごろ（日付、時間は日本時間）：自由リビア放送】

新たに反政府勢力に参加することを表明したいくつかの部族に向けての称賛の挨拶。これら部族はトリポリに向かうとのこと。その上で、リビア西部の部族にも「地中海の花嫁」首都トリポリに向かうよう呼び掛け。

日本時間午前7時30分過ぎ

国民に呼びかけ：「トブルク、アル・ベイダはすでに暴君から解放された」と伝える。

同時に「混乱に乗じて外国人が入って国内の分断を企てている」との呼びかけも放送。

午前7時35分頃

国民と部族に呼びかけ：「トリポリに向かえ。けが人が多数出ている。医療用薬剤をはじめあらゆる物資を送れ。献血に協力せよ…」

午前7時40分頃

国民に呼びかけ：「混乱に乗じて破壊、盗みなどの犯罪に走ってはならない」

午前7時45分頃

警察に呼びかけ：「同胞よ、我々に合流せよ。神の祝福があらんことを！祖国に集え！新たな歴史に集え！」

一方、同時刻のLJBCのテレビチャンネル「Al-Jamahiriyah Satellite Channel」は通常番組編成での放送であったが、愛国的な歌（カッザーフィーをたたえる内容が多い）のビデオクリップが流れる比率が格段に高くなっているのと、トリポリ中心部の「緑の広場」に集まった人々の様子をライブで流す（垂れ流し）時間が増えていた。通常ならインタビューとか対談、それにリビア紹介のドキュメンタリーなどが放送されている時間帯である。そのほか、ニュースの時間は通常の毎正時からではなく、変則的な時間に突然始まるなど、普段とは趣を異にしていた。ただ、フランス語ニュース（日本時間23時）は継続されており、また気象予報もいつもの女性キャスターが出演して進行していた。

22日午前8時半過ぎに、突然カッザーフィーが自宅（かつてアメリカ、イギリス空軍が空爆したという建物をそのまま残してあるらしい。庭には米軍の戦闘機を大きな手が握りつぶしている像が立っている）前に傘をさして登場。国民向けに演説を行った。

【2月23日（水曜日）】

この日は22日の午後11時過ぎに国営テレビが緊急ニュースとして「間もなく兄弟である革命指導者（الأخ قائد الثورة=カッザーフィーのこと）が緑の広場に集まった若者たちに向けて演説を行う」と、画面下のテロップを打ったため、「間もなく」を真に受けて待機していたのだが、結局カッザーフィーが登場したのは日本では日付が変わって23日の午前1時をまわったのことだった。

LJBC テレビは、演説の前は延々と「緑の広場」に集まった人々の映像を流していた。リビア国旗である緑の旗を持った人々が実にのんびりと集まり始め、散発的にカッザーフィー指示のシュプレヒコールを繰り返す様子がライブで流れ、バックではリビアの民族音楽がかかっている。海外のメディアが「これはねつ造した映像だろう」という「疑問」を抱かないためだろうか、広場の横の時計塔の時間を映す演出も施されていた。広場に据え付けられたカメラには、数百人が映っているのだが、明らかに動員をかけられた人々だと思われ、しかもカメラアングルの外側は明らかに殆ど人がいない状態で、カ

メラはほぼ固定された状態だった。カメラ前の人垣の後方には、何も関心を示さずに通り過ぎる人々や車の様子が映っていて、人びとの間の温度差の大きさが感じられるなど、現場の雰囲気は逆に伝わってくるような映像となっていた。

カッザーフィーの演説は結局1時間以上続いた。最初の30分だけ聞いていたものの、早口で活舌の悪いスピーチに付き合うことは体力を消耗した。リビアの国内法令集を片手に「国家に銃を向ける輩は… 死刑！外国勢力の侵入を手引きする輩は… 死刑！」と、死刑を連発する様子や、「今リビアはアフリカ、ラテンアメリカなど世界を牛耳っている。かつてリビアという名前を聞いた人たちは、リベリアか？レバノンか？と考えたものだ。それが今、リビアの名は世界に知られるようになっているではないか！」と叫ぶ様子を見ていると、一国の指導者としての威厳や知性がどこにあるのか、という疑問を抱かずにはいられなかった。

国営テレビ放送は、その後この演説を繰り返して放送した。ラジオでも音声と同様に放送された。

【2月24日（木曜日）】

ベンガジの「自由リビアの声」は日本時間22時からおよそ一時間にわたってノンストップで音楽を次々に流したあと、23時ごろからリビア各地の様子の電話インタビューを放送した。リビア西部のミスラータからの電話レポートでは、反政府勢力側がミスラータをほぼ完全に制圧したとの話が伝えられた。もちろん、この電話インタビューの内容の真偽のほどはわからない。反政府勢力側のプロパガンダとして、あたかも反カッザーフィーのうねりが西部の主要都市にも飛び火していることを印象付ける狙いがあったのかもしれない。後に、この時点ではまだミスラータはカッザーフィー政府側の勢力下にあったことがわかった。

2月24日時点で、リビア国内各都市のLJBCのラジオ局のうち、反政府のメッセージを流していたのは依然として東部のアル・ベイダとベンガジの2局だけであった。このころアル・ジャジーラの報道も反政府勢力寄りに偏っていて、反政府勢力が西に向けて進撃を続けているといった印象のレポートなどを繰り返して放送していたものの、実際のところ政府側の勢力はまだ国土のかなりの部分に及んでいた。首都トリポリ、中部の要衝スルト（シルト）などから放送されているLJBCのラジオ放送は引き続きトリポリ発の全中番組を放送していたし、トリポリから出ている国営ラジオのうち、国内向けの「大ジャマヒリーヤ放送」は健在。海外向けの「大ジャマヒリーヤからのアフリカの声」も引き続き通常編成で放送を継続していた。国内向けラジオ放送は、国営テレビが放送したインタビュー（対談）番組の音声を再放送したりもした。海外向けの放送は、前日に行われたカッザーフィーの演説を延々と放送したあと、「朝の輝き=إشراق الصباح」というタイトルのモーニングショーを放送。政府側の余裕のほどを誇示しているかのようすら感じられた。

この時点で注目すべきは地中海沿岸の中部の要衝「スルト」の LJBC の周波数で聞こえてきた番組が、政府系の「大ジャマヒリーヤ放送」であったことである。スルトの放送局がいつ反政府側のメッセージを流し始めるかに注目した。その時がおそらく戦況が大きく動く重要なタイミングとなるだろうと考えたからである。

【2月26日（土曜日）】

日本時間午前 9 時の時点で、リビア国内のラジオ放送がどのように放送されているかをモニタリングして整理した。日本の午前 9 時というと現地では深夜 1 時である。すでにベンガジ、ベイダの「リビア人民の声」は放送を終了していた。金曜の放送とはいえ深夜の放送時間延長は行われていない模様だった。一方国営ラジオのほうは 3 つの周波数が受信できた。1251kHz はトリポリ発の国際放送大ジャマヒリーヤからのアフリカの声、972kHz は国内向けの LJBC（スルト）、そして 1053kHz（トリポリ）は LJBC テレビの音声をサイマル（同時）で流している。

1053kHz の LJBC は、長時間にわたり時間をテレビ（LJBC TV）とサイマル放送を行っているが、テレビが「緑の広場」の様子を垂れ流しにしている時間帯については、別番組（音楽や過去の対談、インタビューの再放送）を放送するなど編成、演出に工夫が凝らされていた。

【2月26日（土曜日）】

地方都市では政府側と反政府側との衝突が伝えられ、反政府側の勢力下に入ったとされていた西部のミスラータで政府側が巻き返しに成功しているとのニュースが入ってきた。午前 8 時過ぎにモニターしたところでは、中部の要衝スルトの放送局は依然として政府側の LJBC を中継していた。

アラビア語インターネットサイト：arabtoday.net に、解放後のベンガジの「リビア人民の声」放送局の内部（コントロールルーム）を写した写真が掲載された。



「自由リビアの声放送・ベンガジ局内の写真としてアップされた画像」

リビアテレビが「国営ジャマヒリーヤ通信のインターネットサイトがハッキングされ

たため、急遽 URL を変更した」とのニュースを流した。カッザーフィー政権に対する海外からの攻撃はインターネットでも激しさを増している模様だ。ハッキングのニュースの後も LJBC のウェブサイトは運用を継続した。

【2月27日（日曜日）】

リビアの反政府勢力に近いメディア関係者の一人（海外在住）に電話で取材。その人物は、2月25日にリビア西部の町ミスラータの放送が反政府勢力の放送を送信し始めたと話した。LJBC のミスラータ放送局は二つの FM 周波数を持っていたが、カッザーフィーの勢力が町から退散する際に、送信機を破壊したという。それを放送局の技術者が修理して電波が出せるようになったとのこと。こうした状況はリビア各地で起きているという。

事実、リビア国内で反政府の機運が高まる前には強力な電波が受信できていた LJBC の 1449kHz が受信できなくなった。1449kHz の送信機はチュニジアとの国境に近いアル・アッサにあるとされているが、そこは反政府側が制圧しているエリアであると思われる。リビアでもっとも強力な送信機の一つが突然沈黙した背景には、ミスラータと同様、カッザーフィー支持派が退却する際に、反政府系の放送が出ないようにする、あるいは出るタイミングが遅れるようにするために送信機を破壊したのだとも推測できた。送信機の修理が完了した場合、強力な電波で反政府系の放送が出てくる可能性がある。

なお、日本時間 17 時の時点でも中部の町スルトからの放送は（972kHz）国営ラジオ LJBC の番組を流し続けている。1251kHz、1035kHz（いずれもトリポリ）も通常通り送信を行っている。

上述の反政府勢力メディア関係者によると、カッザーフィー政権側が押さえている放送局は首都トリポリ、中部の都市スルト、そして革命の聖地と言われるセブハの 3 都市となっているとのことだった。トリポリとスルトは中波、セブハは FM での放送である。FM 放送の電波はせいぜい半径 100 キロメートル程度にしか届かないため、これらの放送のリビアの国外でのモニタリングは残念ながらできない。

【2月28日（月曜日）】

ベンガジから出ている「自由リビアの声」は、トリポリの市民に対する呼びかけ（勝利は近い！ など、応援のメッセージ）や女性に対して「もはや恐れることはない…」といったメッセージなどを流している。局名告知アナウンスも頻繁に出ている。周波数のアナウンスも行われた。「青年革命団」なるグループのメッセージが放送され、その中で今週の水曜日にリビア各地、各都市の主要広場で「暴君に反対の意思を示すため」大々的なデモを実施しよう！との呼びかけがなされた。また、反政府勢力に協力を表明したりリビア軍の司令官をスタジオに招いてインタビューを放送するなど、情報の幅が

徐々に広がりを見せ放送内容が充実した感がある。

【3月2日（水曜日）】

日本時間7時台のモニター結果では、普段はLJBC TVの音声をそのまま流している1053kHz（トリポリ）がLJBCのラジオ番組を、そしていつもはLJBCのラジオ番組を流している792kHz（スルト）がLJBC TVの音声をサイマルで流しているところが受信できた。このところ、LJBC TVは対談番組をたくさん放送していて、中でももっとも頻繁に出演しているゲストがリビア人の作家 Yousef Shakir という男性である。この人物、もともとは反カッターフィー派の活動家で、反政府組織である「リビア救国国民戦線」のメンバーでもあった。ところが、今はトリポリに戻ってカッターフィー派に寝返ったとして批判されている人物である。本人いわく「もともとは反カッターフィーの立場だったが、このままではリビアがアメリカをはじめとする外国の餌食になってしまう。そのため、リビアに戻って外国の侵略から祖国を守る決意をした。アメリカがリビアへ介入しようとしていることを示す証拠もある」とのこと。番組に出演する際には分厚い資料を手にも持論を展開している。国営LJBC TVはこの人物との対談をこれまでに5回放送していて、それぞれの回の番組が何度も再放送されている。

日本時間22時過ぎに「直接民主主義制度（ジャマヒリーヤ）誕生34周年の演説」がトリポリから生中継された。先日雄叫び調でトランス状態だったカッターフィーとはうってかわって、比較的落ち着いた雰囲気での演説であった。見た感じも先日のカッターフィーよりも少し痩せていて、色も浅黒く見えた。先日のカッターフィーは巷間言われている「影武者」だったのではないかと思うほどだった。この演説は、国営ラジオ、テレビで同時生中継された。

一方、反政府側のベンガジとアル・ベイダは引き続き放送を継続している。東部地域にカッターフィー支持の勢力が攻撃を仕掛けているとの情報がBBCなどによって伝えられた。ベンガジに近いアジュダビヤなどでは激しい戦闘が行われているとアル・ジャジーラのニュースが伝えている。

ベンガジの「自由リビアの声」は珍しく興奮状態で「カッターフィーの軍隊の攻撃に備えよ。アッラーのご加護のあらんことを！暴君とその支持者に敗北を！勝利は我々とともにある…」とのメッセージを放送。同時に、首都トリポリやザーウィヤの人々に向けては「今こそ決起の時だ。今日がすべてだ。明日ではいけない！」とのメッセージを放送した。

反政府側もどうも一枚岩というわけにはいかないようだ。反政府側の「連立青年同盟」（直訳）あたりは「外国勢力の介入は自由リビアには不要だ」との主張を繰り返している。その一方で「外国軍隊によるカッターフィー派への空爆を求めたい」との声も一部で出ているようだ。相反する主張にみられる矛盾と足並みの乱れがここにきて出てきていることが、カッターフィー派の巻き返しを呼んでいる一因となっているのではないか。

リビア中東部の町の様子をめぐってアル・ジャジーラとアル・アラビーヤのが相反する情報を伝えるなど、情報は錯綜しており、正しい情報をつかむことは簡単ではない。ラジオのモニタリングを通して客観的な事実を把握することが何よりも大事である。

【3月1日（火曜日）】

国営、反政府双方のメディアが、国内の部族に対して「こちら側に味方しろ」との呼びかけを盛んに流している。ラジオやテレビをフル稼働させながら、プロパガンダ戦が激しさを増していると感じる。

反政府派はトリポリなどでのデモに際して「市内の中心部の広場に集結し過ぎないように。ひとところに集まると攻撃の対象となりやすく、まとめてやられてしまう」と注意喚起を呼びかけている。カッザーフィー派からの攻撃に対して、デモ隊を分散させる戦法に出てきているようだ。

【3月4日（金曜日）】

日本時間7時45分ごろから「自由リビアの声」「自由リビア放送」（ベンガジ、アル・ベイダ両局）をモニタリング。現地では午前1時前になる。

675kHzのベンガジ局を聞いていて驚いた。歌と声明の繰り返しの番組が、日本時間8時15分ごろ（つまり現地では午前2時15分ごろ）に急に途切れて、礼拝の呼びかけである「アザーン」が流れ始めた。しかも、アザーンの最初の文句（الله أكبر الله أكبر アッラーフ・アクバルアッラーフ・アクバル）が流れるとプチッと音声途切れ、もう一度繰り返す。そして二度目も最初のフレーズが流れたとたんぷちと切れて、3度目はアザーンが全部流れたのだが、その直後にアナウンサーが「トリポリ時間の昼の礼拝のアザーンでした」と紹介… そもそも現地時間午前1時15分という時間には礼拝は絶対に行われず、アナウンス自体も深夜なのに昼の礼拝と紹介していた。アザーンとそれに続くアナウンスはすべて録音されたものだとわかったが、それにしても3度も間違えて録音を流しながら、アザーンの後続いた番組の中では「間違えて流しました。すみませんでした」という訂正アナウンスは一言も出なかった。

イスラム教徒にとって、一日5回の礼拝はとても大事なもの。放送局は細心の注意を払って礼拝の時間にあわせてアザーンを流すわけで、本来ならばこのようなミスは許されない。知人のアラブ人にも訊いてみたが「自由リビアの声がそのようなミスをしたとしたら、多くのムスリムが躊躇することなくカッザーフィー支持に寝返りしかねないほどの大事件だ。決して大げさな話じゃない」と心配していた。

2度ミスをして3度目に敢えてありうるはずのないアザーンを流したことについては、単純なミスである可能性と、恣意的な何らかの「暗号」であった可能性も考えられる。

実は、2月半ばにベンガジの「自由リビアの声」がデモ隊に対する指令と見られる暗

号を交えた呼びかけを行ったことがあった。「B地点に集結し、その後C方面へ…」などといった、具体的な場所の名前の代わりにアラビア語のアルファベットを使った呼びかけが放送されていた。自由リビアの声の番組の中にはほかにも我々がうかがい知ることがないような暗号や秘密指令が隠されている可能性がある。

このような暗号による秘密指令が行われていた事実、そしてちょうど東部のいくつかの町がカッザーフィーの軍隊に攻撃を受けているタイミングであることを考えると、何らかの暗号としてアザーンを流すという可能性はゼロではない。ただ、もっとも崇高であるべきアザーンやコーランをよりによって何らかの暗号として使うだろうか。現地の関係者に直接話をきく機会がなければ謎は解けない。

一方、このできごとから遡ることおよそ5分、日本時間8時10分に1125kHzのアル・ベイダ局が放送を終了するところが受信できた。アナウンサー2人が掛け合いで話をしている中で、急に一人が「それではまた明日朝9時に放送を再開するまで、聴取者の皆様、おやすみなさい」とアナウンス。局名告知は何も流れず、またコーランも流さずに合唱曲で放送が終了した。この歌は旧リビア王国時代の国歌 يا بلادي である。東部の反政府派の影響下にある地域では、王国時代の旗、国歌が復活していて、放送でも古い国歌が頻繁に流されるようになっている。

【3月7日（月曜日）】

アラビア語で現地の情報を発信しているインターネットサイト「ON ISLAM」(<http://www.onislam.net/arabic/>)に3月5日付でアル・ベイダの「自由リビア放送」に関する記事が写真とともに掲載された。アル・ベイダ局に関する記事はON ISLAMの独自ネタだとのことである。

この記事には「アル・ベイダ、ベンガジの人々が、英雄オマル・ムフタールをいただく革命の声を常に絶やさないとの誓いにもとづき、この放送はAM11.25kHz^(原文ママ)で放送されている」と紹介されている。

記事の中では、アル・ベイダにある「オマル・ムフタール大学のイドリース・ファディール教授」の話が引用されていて、その中で教授は「かつて国営ラジオが使用して、今は放置されていた建物の中に急ごしらえの放送設備を持ち込むことで、混乱の中で素早く放送を始めることができた。我々の放送を聴けば、カッザーフィー側が流している情報の嘘がはっきりとわかるだろう」と話している。

またアル・ベイダ局のプロデューサー、ナージー・アブドゥ氏は「自由リビア放送」の内容について「我々は放送を通して常々若者に対し、遺恨を暴力で晴らすのではなく、常に赦しの心を持ってとのメッセージを送っている。これは暴君カッザーフィーが行っていることと全く反対の主張である」と述べたとされている。

カッザーフィー政権側が「反政府勢力の背後にはアル・カーイダがいる」と批判していることに対して、アブド氏は「アル・カーイダと関係のある放送局が、歌や音楽をこ

のように多く放送することがあるのか？事実から判断すれば、その批判が的を射ていないことがわかる」とも話した。



「自由リビア放送～アル・ベイダ～の局員たち」（ON ISLAM サイトより）

【3月8日（火曜日）】

スルトから放送されている LJBC の番組にも切迫感が出てきた。これまでは愛国歌（カッザーフィー側の）と短い話などが放送されていたが、ここに来て音楽の比率が下がり、長い演説が放送される傾向がみられる。演説の内容は、国民に向けて現体制の維持を呼び掛けるものや、東部のベイダ、ベンガジの住民に向けては「反逆行為」を止めるようにとのメッセージなどである。ちょうど反政府勢力によって行われている「自由リビアの声」と正反対の内容である。演説調のメッセージも増えている。

ただ、メッセージの中では「改革の要求を否定する者は誰もいない！」とするこれまでの強硬一辺倒の雰囲気にも変化が現われている。「今日起きている混乱を正当化できる者は誰もいない。これは破壊行為以外の何物でもないからだ。我々はリビア人同士である。改革を前に進めようではないか。リビアはリビア以外の何物にも代えることができないのだ」といったメッセージも流れている。

一方アル・ジャジーラのアラビア語チャンネルは、反政府勢力はスルトの町から 100 キロあまりの場所まで進攻したものの、カッザーフィー派の部隊による激しい攻撃に遭い、再び撤退を余儀なくされたと伝えている。さらに、アル・ジャジーラなどのメディアが、カッザーフィー側と反政府勢力側との間で秘密裏に接触が試みられていて、カッザーフィー側から身の安全を保証するなら退陣も辞さずとの提案が行われたとも伝えられている。反政府側の反応は、これまでのカッザーフィー政権側の専制的な政治手法をふまえると交渉には値しないと冷ややかだとも伝えられているが、一部では「72 時間以内にカッザーフィーが退陣・出国すれば訴追は免除する」との反政府側の反応も伝えられており、情報は錯そうしている。

【3月10日（木曜日）】

リビア国営の LJBC TV やアル・ジャジーラを視ていると、反政府勢力側が確保したとされていた町のうちミスラータやザーウィヤ、ラース・ラヌーフといったところが、

再びカッザーフィー派によって奪還されたように見える。LJBC TVは、ラース・ラヌーフやミスラータ市街の映像を放送。「アル・カーイダの支援を受けたテロリストたち」から町を解放したと伝えた。アル・ジャジーラも、制空権を握るカッザーフィー派の激しい攻撃によって反政府側が要衝の都市から一時退却を余儀なくされたと伝えており、戦況はカッザーフィー派側に有利に動いているようだ。

カッザーフィー派は戦闘機を使って東部の主要都市の生活インフラ（電気、水道などの施設）を徹底的に空爆する構えだと言われている。放送局関連施設は空爆のプライマリーターゲットと位置づけられるものと思われる。激しい空爆が伝えられる中、ベンガジ、アル・ベイダから放送されている「自由リビアの声」が依然として放送を継続できていることは、これらの都市がまだ反政府勢力によって防衛されていることがうかがえる。

一方、制空権を握るカッザーフィー側の要衝、中部の町スルトは盤石の体制といわれており、スルトのLJBCラジオ局はカッザーフィーの演説を度々ダイジェストで流したり、反政府勢力の放送同様、部族や市民に対する呼びかけを続けたりしている。

フランスのサルコジ大統領がリビアの反政府勢力を「正当な政府の代表」と承認したニュースが流れると、リビアのLJBC TVはアラビア語、英語、フランス語の字幕で「緊急ニュース」を放送。「ニコラ・サルコジが選挙キャンペーン中に危険なスキャンダルに巻き込まれたことを示す情報をリビア国営通信が手に入れたらしい…」と伝えた。ただ、急ごしらえの字幕だったのか、英文のテロップの文章が意味をなしていない。自動翻訳を行ったか... しかも、リビアのメディアの常として、「Breaking News」とうたって字幕を出しているにもかかわらず、およそニュースとは言い難いような稚拙で杜撰な中身であった。「革命指導者同志（カッザーフィー）がどこかの国の大統領などと電話会談をした」などという価値のない情報がトップニュースになるのはカッザーフィー体制のもとではごく普通のことではある。

【3月16日（水曜日）】

リビアの放送をめぐる焦点は、これまで中部のカッザーフィー派の拠点都市スルトの放送がいつ反政府側の番組を流し始めるかだったが、ここにきて逆に「ベンガジの自由リビアの声がいつカッザーフィー政権側の放送を流し始めるか」にポイントが移る可能性が出てきた。

緊迫した情勢は、放送の内容にも表れている。ベンガジの「自由リビアの声」は、3月上旬ごろまでは「解放都市」からの電話リポートを多く放送していたが、現在電話リポートは殆どなく、愛国歌と各種の呼びかけが番組の大半を占めるようになっている。各種呼びかけの内容も、以前は具体的な行動を指示（たとえばデモを行う日時を流すとか、戦術を流すとか）するものが多く聞かれたが、今流されている呼びかけは抽象的な内容の繰り返しが増えていているなど、以前ほどの余裕は感じられなくなっている印象だ。

しかも、ベンガジからの放送には先週あたりからガリガリ・バリバリという雑音が目立つようになってきている。カッザーフィー政権側が自由リビアの声に妨害電波（ジャミング）をかけているという情報が流れたことがあるが、その可能性も否定できない。1980年代にスーダンから放送を行っていた反政府ラジオ放送局「リビア人民の声」に対してリビア政府が妨害電波を発射した（註：本稿第2回の内容を参照されたい）が、その際にはベンガジの放送にかかっている雑音に類似した音であったことが思い出される。

国営のLJBC TVのほうは、これまで「緑の広場」からの生中継（とされる）映像を流すばかりだったものが、カッザーフィー派が奪還したとする都市の様子を流すことが増えている。

【3月18日（金曜日）】

日本時間13時過ぎ、1449kHzでコーランの朗唱（早いテンポ）を延々と流す放送が受信できた。リビア情勢が緊迫の度を高め始めた数日後からずっと聞こえていなかったLJBCの周波数の一つである。停波の直前まではトリポリからのLJBCの全中番組を流していた。

1449kHzの放送は結局15時になってもコーランの朗唱を流し続けていて、結局114あるSurah（章）の最後まで全部流し切るところまできた。LJBCのコーラン放送かな、とも思ったが、今のご時世でLJBCがコーランをノンストップで流し続けるということはあまり考えられないこと。なので、114章が終わったら何らかのアナウンスが出るのか、それともまた再びFatihah（第1章）から繰り返すのか…と思ってその瞬間を待った。

第114章が終わってしばらくの沈黙ののちに出た局名告知アナウンス（ID）は「ミスラータの自由リビア放送です اذاعة ليبيا الحرة من مصراته」という一言。アナウンサーはまた「今日は2011年3月18日。輝ける朝の挨拶をいたします。皆さん、それぞれの持ち場についてください。準備をしてください」とのメッセージも読み上げた。その後旧王政時代の国歌が流れた。数日前から、ミスラータからはすでに反政府側の放送が出ているという情報があったが、それはFM放送であって、中波の周波数が復活したという話は出ていなかった。しかもそれが、かつて国営ラジオが大出力でプロパガンダを流していた1449kHzで出てくるとは、本当に驚いた。

しかも、この1449kHzの送信機は非公式情報によるとリビア西部、チュニジア国境からわずか数キロのアル・アッサという場所にあるとされている。つまり、首都トリポリをはさんで反政府派の放送局（スタジオ）と送信所が繋がったことになる。さらに、1449kHzはおそらくカッザーフィー派によって送信施設の一部あるいは全部が破壊されたものとみられていたことから、今回1449kHzが送信を再開したことは、その修復が完了したことをも示唆している。あるいは送信所への電力供給が再開されたということになる。このことから、チュニジア国境近くのアラ・アッサ付近は、送信所を修復

できるだけの部品の供給が可能で、かつ修復作業ができ、大電力の供給が滞らない程度に治安状況が安定しているという推測もできる。

アル・アッサに近いズワラについては、カッザーフィー派の攻撃が度々行われて、一進一退の攻防が続いているとされてきたので、1449kHzの復旧、反政府側の放送の送信開始は大きな節目として捉えたい。

ミスラータの「自由リビア放送」は、局名告知アナウンスと愛国歌を一曲流した後はずっと「アッラーは偉大なり、アッラー以外に神はない」との男声による唱明（タクビール）が2時間以上にわたって続いた。これは「インターバル・シグナル」（註：ラジオ放送局が放送開始前に流すオルゴールなどの信号音のこと）だともいえる。1449kHzではFMで流されている「ミスラータの自由リビア放送」の番組とは別番組が出ているのかもしれないが、確認できていない。

国連が「飛行禁止空域」の設定を決め、いよいよ空爆が始まる事態を前に、ラジオ放送の面でも反政府勢力が一步駒をすすめたかたちだ。カッザーフィー派の牙城である中部の町スルトにも先日、反政府勢力の旗が掲げられたという情報が流れている。一方で、カッザーフィー政権側は「国民の命を守るためにすべての戦闘行為を中止する」との声明を発表するも、ベンガジ郊外の空港をはじめ、各地に空爆を含む攻撃を加えている様子である。

【3月20日（日曜日）】

欧米各国による対リビア軍事行動が始まり、リビアをめぐる情勢は新たな局面を迎えた。日本時間の13時ごろからしばらくモニタリングをした結果は以下の通りである。

インターネットサービスは、3つのテレビチャンネル（LJBC TV、Al-Libiyah TV、As-Shababiyah TV）はいずれも反応はあったが、リビア国内の回線が混雑しているのか、すぐにダウンする状態。日本時間17時の時点では3つのチャンネルともつながるものの接続状況が悪く頻繁に途切れる状態。LJBCのHPは一応ニュースのアップデートが行われている。衛星テレビのLJBC TVは番組を継続中だが、通常編成ではなくなっている。

ラジオは、国営のLJBCの国内向け972kHz（スルト）と1053kHz（トリポリ）、そして海外向けの1251kHz（トリポリ）がそれぞれ別系統の番組を放送している。711kHzは受信できない。

地中海岸の中部の要衝で、カッザーフィー勢力の拠点都市であるスルトから送信されている972kHzは、音楽と東部のベンガジの住民向けのメッセージ（偉大な革命の精神をもって、団結を！裏切りと反逆は許されない！といった内容）を、部族の代表（自称）のメッセージとともに流している。

トリポリの1053kHzは、テレビで流された討論番組の再放送や音楽で構成されている。音が悪い。

トリポリの 1251kHz は海外向けの大ジャマヒリーヤからのアフリカの声。日本時間 14 時ごろにチェックしたところでは、通常ならモーニングショー「太陽の輝き」اشراق الشمس が放送されている時間だが、歌が延々と流れる合間に局名告知アナウンスが時々入るのみ。ニュースは日本時間 15 時 15 分から放送されたが、通常のニュースではなく、「ニュースの要旨」を流し読みをするだけの内容で、10 分間で終わってしまっただ。その後は再び音楽（歌）が延々と… 電波も瞬断が頻発しているようだ。給電施設にダメージが出ている可能性がある。

反政府勢力側のラジオ放送は 1449kHz の自由リビア放送～ミスラータ（北西部、チュニジア国境沿いのアル・アッサに送信所がある）が延々とタクビールを流し続けている。18 日の日本時間 15 時 42 分ごろに局名告知アナウンスが出た後、丸 2 日以上にわたって「アッラーは偉大なり！アッラーの他には神はない」を延々と繰り返していることになる。リビア関連の Facebook や Twitter などでも 1449kHz のことが紹介され始めた。

そのほか、反政府派の「自由リビアの声～ベンガジ」675kHz、「自由リビアの声～アル・ベイダ」1125kHz は確認できず。

余談だが、1053kHz で LJBC を聞いていたら、2 月 22 日のカッザーフィーの演説のフレーズ「裏切り者、反逆する者のいる通りという通り、小路という小路、家という家を徹底的にぶっ潰す！」が歌詞になった歌が流れていた。

【3 月 21 日（月曜日）】

米軍の心理戦部隊に所属する EC-130J コマンド・ソロが、3 月 20 日からリビア向けのメッセージ放送を流し始めたとの情報をオランダの国際放送 Radio Netherlands の Media Network の Weblog が伝えている。

コマンド・ソロは別名「空飛ぶ放送局」とも呼ばれ、ラジオとテレビの放送設備を持っている。米国が関係する軍事作成の際に、対象国の国民向けにこのコマンド・ソロが上空から放送するラジオやテレビによる放送を通してメッセージを流すのだ。2001 年のアフガニスタンでの空爆作戦、その後 2003 年のイラクでの軍事作戦などの際に、上空からさまざまなメッセージを放送したことで知られている。

今回も欧米がリビアに飛行禁止空域を設定したのに伴って、コマンド・ソロが活動を行っている。周波数は 6877kHz (USB)。中途半端な周波数を使用しているのは、おそらくこの周波数がリビアの港湾当局の無線周波数に近接しているか、同じだからではないかと推測される。

日本時間の 14 時過ぎごろからおおよそ 10 分～15 分の間隔でアラビア語のメッセージが放送されているところの確認できる。メッセージとメッセージの合間には。アフガニスタンやイラクを空爆した時に流れていたメッセージ放送とは異なり、音楽は流れず、無音が続いたあと突然メッセージが読み上げられるパターンである。

放送されるメッセージにはいくつかのパターンがあり、さらにアラビア語だけでなく英語やフランス語によるメッセージも流されている模様。

受信できたメッセージの内容は以下の通り」:

البحارة الليبيون ! اتركوا سفنكم فوراً ! اتركوا معدنكم وارجعوا الى أسركم او بيوتكم ! معمر القذافي ينتهك قرار الامم المتحدة الذي يأمر بإنهاء الاعمال العدائية في بلدكم. لحمايتكم اتركوا سفنكم فوراً ! لا تحاولوا ان تعودوا الى سفنكم!

(訳)「リビアの(リビア人の)船員たちに告ぐ! ただちに船を離れなさい! 持ち場を離れ、家族のもとや、家に戻りなさい! ムアンマル・カッザーフィーは、あなたがたの国における敵対行為の停止を求める国連決議に違反している。あなた方の安全のために、ただちに船を離れなさい。決して船に戻ろうとしないように!」 (同じフレーズを二度繰り返し)

飛行中の航空機からの送信(だろうと思われる)なので、受信状態は不安定で、メッセージの内容を完全に聞き取ることがなかなか難しい。

日本時間13時ごろにチェックしたところでは、スルトから発信されている972kHzのLJBCは相変わらずベンガジ市民向けのメッセージとカッザーフィーの演説を放送していた。1053kHzのLJBC(トリポリ)は無音。1251の「大ジャマヒリーヤからのアフリカの声」は放送を継続していた。

反政府勢力側の1499kHzは、相変わらず延々とTakbirを流し続けている。675、1125kHzでの反政府側の2局については、放送を行っていることが確認できた。

午前中には接続できていたLJBCのネットサイトは日本時間15時過ぎから接続できなくなった。衛星テレビLJBC TVは送信を継続中。ただ、ニュースの放送時間が変更になるとともに、ニュースの枠時間も短くなっていく。23時にはアラビア語とフランス語のニュースを一度に放送した。画面には「ヌアクショットで大規模デモ。十字軍帝国主義者たちによる偉大なジャマヒリーヤへの攻撃を非難」との字幕がアラビア語と英語で出ている。これがBreaking News扱いである。

【3月22日(火曜日)】

自由リビア放送～ミスラータが本放送を開始した模様。3月18日の15時40分過ぎ(現地では7時40分過ぎ)から延々とTakbir(唱明)を流し続けていた「自由リビア放送～ミスラータ」が、また延々とコーランを流しているところが今朝7時30分過ぎに確認できた。

ミスラータの1449kHzは7時ごろチェックした時には電波がでていなかったが、7時30分過ぎに電波が出始めた。その後18日に受信したときと同様、コーランの朗唱を延々と流している。ちょうど第80章のあたりを流していて、あと20分ほど待つと最終章の114章まで朗唱が終わることがわかったので、そのまま聴き続けることとした。

第114章が終わってIDが出るかと期待したが、そのままドゥアー（註：祈りのことば、コーランとは別）となった。しばらくドゥアーが流れたあと、再びコーランの第一章「開扉章」からの朗唱が始まった。結局ずっとコーランの朗唱となるのかと思いつつ、一時チェックを中断した後、再び日本時間11時ごろに改めてモニタリングを再開したところ、コーランではなくミスラータ市内からの電話リポートが放送されていた。コーランが終わって番組がいつ始まったのかは残念ながら確認できなかった。

放送が始まったといっても、ミスラータの町はカッザーフィー派との攻防の最前線で不安定な状況にあると思われる。それを反映してか、放送の内容は荒削りなものだ。愛国歌と局名告知アナウンスが聞かれた他、さまざまな人が入れ替わりで演説をするという構成の繰り返しである。しかも演説が長い。おそらく原稿なしで話しているのであろうが、まあよくもこれだけ口が回るものだと驚いてしまうほど雄弁である。内容はカッザーフィー政権を支持する人々（勢力）に反乱を呼び掛けるものや、各都市の反政府勢力の団結を訴えるものばかりだ。

ミスラータの「自由リビア放送」は、局名アナウンスを：「自由リビア放送、自由と威厳の声です。アッラーは偉大なり、アッラーは偉大なり、アッラーは偉大なり！アッラーの恵みのあらんことを！」と出している。ミスラータからの放送である旨はめったにアナウンスしない。どちらかというといスラム色がとても濃い放送だと感じる。

日本時間の21日23時過ぎにはTakbirを流さなくなると、局名アナウンスが出た後、本放送がスタートした。

一方、国営（カッザーフィー派）LJBCの衛星テレビチャンネルは相変わらず放送を継続している。カッザーフィーの住居があるとされるBabu-l-Aziziyah周辺で人々がカッザーフィー支持を叫ぶ映像（人数は明らかに少なくカメラの前以外は閑散としている）が流されたり、古い資料映像（米軍機が墜落した残骸など。いつ頃の映像だろうか？）を流したりしている。モーニングショーの放送は継続している。アル・ジャジーラなど海外の衛星チャンネル批判も相変わらず放送している。その他はミュージックビデオ（クリップ）と既放送番組の再放送である。

LJBCのインターネットサイトはきのうの午後から繋がらない。

国営LJBCのラジオは1053kHz（トリポリ）が日本時間の今朝の段階で確認できず。972kHz（スルト）はカッザーフィー支持の放送を継続中。

米軍がリビア向けに航空機（EC-130J）から行っているメッセージ放送はアラビア語と英語のメッセージが放送されているところが受信できた。メッセージの内容はきのう聞いたものと大差ないが、リビア軍の将校に向けた別ヴァージョンが含まれていた。英語のメッセージを耳にしたのは初めてである。

【3月23日（水曜日）】

リビア国営（カッザーフィー派）のLJBCのインターネットサイトは、23日朝（日

本時間)の時点で復活している。ニュースも更新されている。きのうカッターフィーが出した、「植民地主義十字軍による軍事行動」を非難する声明について紹介している。ライブストリーミングで配信されている LJBC TV、Shababiyah TV、Al-Libiyah TV の三つのチャンネルも復旧していて、若干コマ落ちするものの安定して接続できる時間もある。

衛星テレビについては LJBC TV が放送を継続中。カッターフィー支持派のデモが各地で行われている… と LJBC は伝えているが、デモというには余りにも人数が少なく、数十人が「氣勢を上げた」というほうが適当な規模のように見える。子どもにまでカッターフィー支持のスローガンを叫ばせるなど、1991 年の湾岸戦争の末期のイラクを思い出させるような雰囲気である。

カッターフィー政権側のラジオ放送は、1251kHz の「大ジャマヒリーヤからのアフリカの声」(トリポリ)、972kHz の LJBC スルトが引き続き確認できている。1251kHz は、通常番組「太陽の輝き」を流していた。972kHz がやはり一番威勢がいい。1053kHz は確認できなかった。

反政府側は 675kHz のベンガジの「自由リビアの声」が確認できたが、1125kHz でアル・ベイダから放送されている「緑の山からの自由リビア放送」は放送時間外らしく未確認。1449kHz の「ミスラータの自由リビア放送」についても今日はまだ確認できていない。ここのところ毎日オールナイト(現地時間)で送信を行ってきたが、今日は休止しているようだ。

【3月25日(金曜日)】

朝の定時モニタリングでは政府側の LJBC、反政府側の「自由リビア放送」ともにすべての周波数で受信できていた。ただ、政府側の周波数のうち 1053kHz、1251kHz とともに信号が弱くなっているようだ。

【3月26日(土曜日)】

1449kHz の「自由リビア」は放送の内容が徐々に変化してきている。先行して放送を行っている反政府派のベンガジ、アル・ベイダの放送局の番組が「手作り」であるのに対して、1449kHz の放送はその内容や構成、音作りから「外国」の匂いが強く感じられるようになってきている。

1449kHz をずっとモニタリングしていると、18日に電波が出てきたときには「ミスラータの自由リビアの声」との ID を出していたものが、その後はミスラータの地名をまったくアナウンスしなくなっていることに気づいた。

放送の内容(呼びかけなど)は明らかに事前に録音されたもの。しかも、エコーやサウンドエフェクトを多用したスポットメッセージが次々に流れている。Takbir(アッラーは偉大なり!アッラーのほかには神はない!)を延々と48時間以上流してみたり、コ

ーランの朗唱を第一章から最終の第百十四章まで一気に放送したり、愛国歌をうまく編集してループにしたうえで、数十分にわたって延々と流してみたりと、単純な放送器機だけではなかなかできないような放送内容である。

欧米によるリビア攻撃が始まったのに合わせる形で電波を出し始めた 1449kHz の「自由リビア放送」。どうも、イラクやアフガニスタンで軍事作戦が行われた際に米軍によって行われた「自由イラクの声」「Information Radio」にかなり雰囲気似ているように思われる。

(次回に続く)

『「リビア」という国をラジオで追う』

来月、最終回となる第 4 回では、2011 年 3 月末からカッザーフィー政権崩壊までの、およそ 7 か月にわたるラジオ・テレビモニタリングの記録をクロノロジー形式で紹介する。

